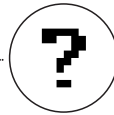


## Frequently Asked Question



いまさら聞けない



いまだから聞きたい

このコーナーでは読者の皆さんのインターネットに関する疑問や質問にお答えします。「?」と感じたことはどのようなことでも構いませんので、下記のメールアドレスまでご質問ください。なお、ご質問へのメールでの回答はできませんのでご了承ください。

ご質問はこちらまで  
im-welove@impress.co.jp

今月のポイント

- 1 複数の宛て先に向けたメール送信法
- 2 無線LANの「チャンネル」の仕組み



勤め先で、複数の宛て先に向けて同じ文面の案内状をメールで送信することになりました。その際、「宛て先 (To) 欄」に送信先を並べて送るのは危険だと聞いたのですが、何かいい方法はないでしょうか? (K・Sさん)



1通のメールを複数の宛て先に送れる「同報配信」は電子メールの大きなメリットです。しかし、使い方を誤ると関係者に迷惑をかけてしまうので注意が必要です。

まず、メールソフトの「宛て先 (To) 欄」に送信先のアドレスを羅列することはやめたほうがいいでしょう。なぜなら、To欄に複数のアドレスを入力して送った場合、受信した人が他の受信者のアドレスを知ることができるからです。ご質問にある「複数の宛て先」が顔見知りの間柄であれば問題ないでしょうが、仕事のメールなどを送る場合、受信者同士は面識がないことも多いでしょうし、そればかりか競合関係や敵対関係にあることも考えられます。

そこで、こんなときは「Bcc」が使われます。Bccはブラインドカーボンコピーの略で、Bcc欄に入力されたアドレスは受信者から見られなくなります。ですので、複数の宛て先にメールを送る際になどにBccはよく使われます。お使いのメールソフトにも「To」欄

の下のほうに「Bcc」欄があると思います。

また、同報配信用のツールを使うのもいいと思います。たとえば「白やぎさん.com」というサービスでは、1通のメールを同時に10万件の宛て先に向けて送信できます。こうした同報配信サービスは、アドレスリストと名前などのデータを用意しておくことで、個々の宛て先に対して「様」「××様」などのように文面をカスタマイズすることも可能です。なにしろ専用サービスなので、配信時刻の設定や文面のチェックなどもできてたいへんに便利です。利用には料金が必要ですが、業務で使うのなら専用サービスをおすすめします。(編集部)



上は「白やぎさん.com」。初期費用は1万円で、月額費用は1万円～(送信先の登録件数によって異なる)。

[www.yagiz.com](http://www.yagiz.com)

その他の主な同報配信サービス

・ AltoBase | ASP

[www.altobase.jp/asp/](http://www.altobase.jp/asp/)

・ スリーメール

[www.3hands.net/service/3mail/](http://www.3hands.net/service/3mail/)

・ アウトバーン

[www.tricorn.net](http://www.tricorn.net)

メールの同報配信は要注意、  
専用サービスが安心でおすすめ



Q

無線LANの設定をしていたら「チャンネル」という項目がありました。現在は「14チャンネル」になっているのですが(おそらくデフォルト設定のまま)この「チャンネル」とはどのように設定すればいいのでしょうか? 併せて仕組みも教えていただければと思います。(鹿児島県 A・Mさん)

A

## チャンネル設定は「5つ飛び」で、電波干渉を避けて使おう

当然のことですが、無線LANは電波を使って通信しています。電波にはラジオでおなじみの「周波数」というものがあり、2つの電波が同じか、もしくはごく近い周波数を使っているときは干渉を起こして混信してしまい、通信ができなくなったり、効率が悪くなったりします。

現在、一般に普及している無線LANは「IEEE802.11b」という規格です。この規格の通信速度は11Mbpsとなっていますが、電波の干渉が起きると遅くなります。このIEEE802.11bに対して、日本国内では「ARIB STD-T66/RCR STD-33」という規格が決められていて、その周波数帯域として2.400GHzから2.497GHzまでの97MHzが割り当てられています。しかしこの帯域を自由に使っていいというわけではありません。実際にはその中に設定された14個の「チャンネル」のいずれかを使うことになり、チャンネルごとに使用する「中心周波数」

」が決められています。IEEE802.11bの場合、その上下それぞれ10~11MHz、すなわち22MHz程度の帯域を使って通信します。たとえばチャンネル1の中心周波数は2.412GHzですが、実際の通信では、だいたい2.401~2.423GHzまでを使います。

全体で97MHzしかない2.4GHz帯の帯域に22MHz幅のチャンネルを入れるには、当然ながら重なる部分ができます。この重なりを示したのが下の図です。中心周波数が5MHzずつずれているのがわかります。なお14チャンネルだけは、13チャンネルまでと少し離れています。

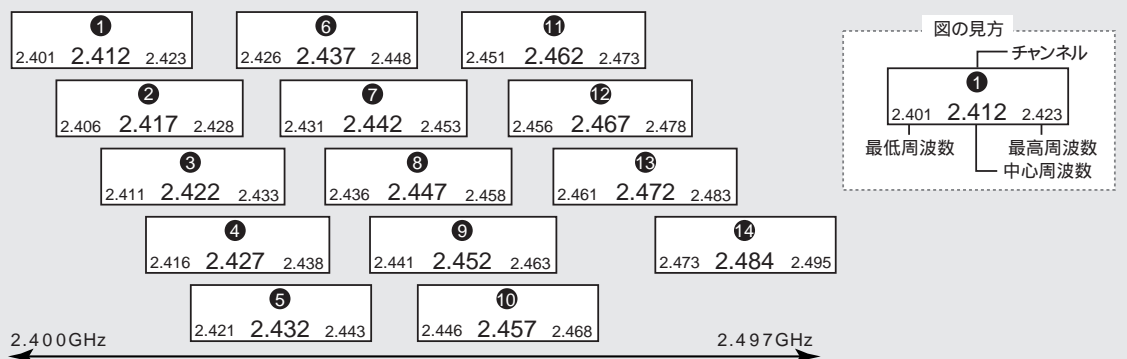
1台のアクセスポイント(親機)だけを利用する場合は、何の問題もありません。この中のどのチャンネルを選んでも、電波の干渉は起きません。問題は複数のアクセスポイントを利用するときです。この場合、隣接あるいは近いチャンネルを使うと、電波干渉が起きてしまいます。干渉を完全に

避けるには、使用するチャンネルを5チャンネルずつ離して、1、6、11チャンネルとし、それに14チャンネルを加えた合計4チャンネルを使います。この組み合わせが、無駄なく最大限に使う方法となります。

さて、14チャンネル分割り当てられているのは日本だけです。欧米ではこれより少ない割り当てしかされてなく、ハードウェアも日本に対応していないことがあります。有名どころではアップルコンピュータのAirMacがそうで、13チャンネルまでしか使えません。ですのでAirMacを電波干渉なく使うには、最高で3つのチャンネルしか使えないわけです。ただし、わずかな電波干渉に目をつぶれば、1、5、9、13の4つのチャンネルを選ぶことも可能です。

設置場所の広さや利用者数の問題からアクセスポイントを増設する場合は、以上の点に注意してチャンネルを選択してください。(本誌アドバイザー 井上尚司)

IEEE802.11bのチャンネルの割り当て



IEEE802.11bの場合でも、隣り合うチャンネルでは周波数帯が重なる部分があることがわかる。チャンネルを設定するときは、周波数帯ができるだけ重ならないように注意するといいたいだろう。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)